

世界観の転換——ニーチェ、ソシュール、ヴィトゲンシュタイン

竹田 青嗣

こんにちは、竹田です。さきほどの紹介にあったように私生活の上ではカラオケやファミコンを楽しんでいる者ですけど、今日はちょっとむずかしい話をします。それは、今、いろいろな文化の問題を勉強するときには「文化相対主義」という考え方・観点がとても重要なんだということです。文化相対主義というのは、世界中にはいろんな場所でのいろんな文化があるけれども、ある特定の文化を絶対視してはいけない、文化というのにはいろんな意味で相対的なものだと主張する立場。今はそういう考え方が少しずつ浸透してきていますが、この考え方は出てくるまでには時間がかかっています。今日は十九世紀後半ぐらいからそれまでの古い世界観の転換ということがおこって、文化相対主義の土台をなすような世界観が成立した、という話を聞

いていただきたい。それでこれから、三人の思想家の話をお願いします。一人はニーチェという人です。この人は、一八四四年に生まれています。もう一人は、近代言語学の祖という風に言われているソシュールという人。この人も十九世紀後半、一八五七年の生まれです。もう一人はヴィトゲンシュタインという人。この人は『論理哲学論考』という本で有名です。とても奇妙な考え方を提出した人で、普通に読むとあまりよく分からないですが、この人がどういふことを言ったのか、という話を三番目にします。

十九世紀後半から二〇世紀の初めにかけて、この三人の思想家の考え方が、それまで連続と続いていたヨーロッパにおける世界観といえますか、古典的な世界観を底からぐるとひっくり返してしまった。そのことと、文化相対主

義ということとは深く関係がある。文化相対主義という言葉葉を、文化というのはみんな相対的なものなんだという単純な把握で終わらせないで、もうちょっと深く、いったい世界像あるいは世界観というものに、どういう転換がおこったのかということをお話したい。

1

初めに、ニーチェです。僕なんか学生のとときは、ニーチェというのは「ニヒリズムの思想家だ」と言われていました。が、ニーチェはニヒリズムということを主張したのではなくて、ニーチェは十九世紀のヨーロッパはニヒリズムの時代だと言ったんですね。かつ、ニーチェはニヒリズムというものをちゃんと克服しなくてはいけない、と強調したわけですよ。

まず、ニーチェのいちばん分かりやすい主張というのは、キリスト教なんかダメだということです。特にキリスト教が持っている道徳、キリスト教がめざしているような理想というのは、一見、理想的な考え方だが、実はニヒリズムなんだ、と。

キリスト教の考え方をいくつかあげますと「貧しい者こそ幸いである」「病めるものこそ幸いである」「何も持っていない、劣等で力のない人こそ天国に近い」。それから、「この世のなかで生活を楽しむ、生それ自身を楽しむ」とい

うのは罪である。人間の生の本当は死んでからあとにある」ということがあります。一言で言うと、この世では、清く、貧しく、生きればいいんだ、永遠のしあわせは死んでから後にある。まあ、そういう考え方ですね。こういう考え方は、ニーチェによると「ルサンチマン」に基づいているということですよ。「ルサンチマン」という言葉は聞き慣れないかもしれませんが、日本語だと「うらみ」だとか「反感」だとか「敵意」だとか、そういう意味で、「うらみ」というのがいちばん近いですよ。感情を反復するというの、昔いう意味らしいですね。感情を反復することというのは、昔あった感情を心の中で何度も反復すること。たとえば「私がこんなに悲しいのは、あいつのせいだ」といううらみじ考えるのがルサンチマンですよ。

キリスト教は、ユダヤ民族から発生しました。ユダヤ民族っていうのは、さまざまな国家・民族に支配されてきたわけですが、その支配者層に対してルサンチマンをもっている。ルサンチマンをもってどういった考え方をしたかというところ、ローマの支配階層というのは、お金を持っている、力もある。だがお金もあり、力もあり、権力も持っている。というのは、人間にとって悪いことだと考え、次に、お金もない、力もない、権力もない、そういうあり方こそ実はいいんだ、と考えた。これは、ニーチェに言わせれば、どこか反転しているわけですね。支配関係において支配され

ているものは自分も豊かでありたい、自分もいろんなことをつくりだしていく力をもちたい。だけど、自分は支配されている、そういう支配されている状態はみじめだ、と考えるのが普通なんです、心理的に屈折して、オレはお金なんていらぬ、あるいは力もいらぬ。なるべく貧乏でいたほうがいいし、なるべく力なんてないほうがいいんだと、考えてしまう。そこから、キリスト教の「貧しい者こそ幸いである」というような教説が出てきている。本当は貧しいほどいいなんてことは、ありうるはずがない。人間というのは基本的には豊かであつたほうがいいし、力をもつたほうがいいんだと。だけど、ルサンチマンによって、お金や力というものがそれ自身を否定する。そこから初期のキリスト教というのは始まっている、そういう批判なんです。それだけではなくてキリスト教というのは、そこから進んで、支配している相手に対して、うらんでいくという屈折した状態から、だんだん自分自身に対してうらみを向けるようになります。というのは、相手をうらんで、相手と反対の価値を自分のなかで、立てるわけですけれども、どうしてもいつまでたってもすっきりしない。そこで今度ルサンチマンが自分自身に向かう。自分自身に向かうとどうなるかというと「私が生きているということ、それ自身が罪である」、「私が生存している、私の生そのものが実は悪いことである」という考え方が生じる。これがキリス

ト教の原罪の発想です。それから私だけが罪があるんでなくて、生きとし生けるもの、つまり全人類すべてが神に対して原罪をもっている。そういう罪意識が成立した。キリスト教はいい面も悪い面もあるんですが、最大の悪いところは、人間の精神性とエロス性（現実生活を楽しむという側面）、それを鋭く対立させて、とにかく現実生活の中で、享樂的なものは全部悪だという、強烈な善悪二元論が中世のキリスト教のうちで打ち立てられたことです。その点をニーチェは批判しています。結局、ヨーロッパに成立した「人間はどうあるべきか」、「世界はどうあるべきか」という理想は、キリスト教に覆われてしまった。現世を、人間の今生きているこの世界を、徹底的に否定してしまうというのは、ニヒリズム以外のなものではない、と彼は診断しました。

ニーチェに「神は死んだ」という有名な警句があります。十六世紀頃から人文主義者が宗教の見直しを行ない、また、十九世紀になると無神論者がたくさん出てきて、キリスト教の信仰が衰えていきます。そのあとヨーロッパに何が出てきたかという一つは近代哲学です。デカルト、カント、ヘーゲルというラインでの近代哲学の成立。もう一つは、近代科学です。近代哲学と近代科学はキリスト教に代って、世界全体がどうなっているのか、人間が生きている意味はどういうことなのか、という真理を教えるよう

な学問だったわけです。一般に、キリスト教が没落して、近代哲学や近代科学の合理的な考え方が現われたので、すこしはよくなったと思うかもしれませんが、ニーチェは、近代哲学も近代科学もキリスト教がもっていたニヒリズムを全部そっくり受け継いでいるだけではなく、ニヒリズムをヨーロッパの中で完成させたと考えます。一見すると皮肉な見方というか、わざと変な見方をしているような感じがありますが、十九世紀のヨーロッパというのはニヒリズムが頂点に達しているような時代だと断言したんです。

近代哲学が説いた道徳というのは、カント風の「あなたは世のため人のために一生懸命つくしなさい。それが道徳であって、その道徳の定めを守ることが人間の自由の唯一の証しだ」という考え方のように、現世否定の道徳で、それはキリスト教から生じたものだ。

また、近代科学というのは、世界が存在していること、人間が存在していることには意味がない。ただ単に宇宙があって宇宙は自然法則に支配されてただ生存しているだけだ。この近代科学の根本的精神をニヒリズムと言わないでなんと言おうか、というのがニーチェの立場です。近代科学にしろ近代哲学にしろ無神論にしろ、みんな世の中に意味がないとニヒリズムを叫んでいる。このニヒリズムはキリスト教に対抗してできたのではなくて、実はキリスト教がいちばん根っこに隠しもっていたものがはつき

り露見して、むしろ、いっそう本質的な形で現われたただ、というのがニーチェの考えです。

ニーチェは十九世紀はニヒリズムの時代なんだということから、今こそ、ヨーロッパがとってきた哲学、宗教的な考え方を根本的にひっくり返して、人間の新しい思想というものをたてなくてはいけません。ニヒリズムを越えるような思想を樹立しなくてはいけません、と考えた。これがニーチェの思想の根本ですね。

ニヒリズムを越えるニーチェのプランとしては、「超人」だとか「永遠回帰」が提出されています。

今まで長いこと続いたキリスト教の伝統のために、ルサンチマンで世の中を考える、弱い人間が集まって大衆社会を形成している。お互いに足を引っ張りあって、相手がちょっと上に立つと嫉妬をいだき、自分より下の者がいると「ざまあみろ」と思うような弱い人間で埋まっている。そこで、人間が今のような人間のままでいるかぎり、ニヒリズムを超えることはできない。だから、このような人間のあり方を超えるような強い人間が現われ、一般の人間のモデルになって、一人ひとりの人間がもっている、ニヒリズムやルサンチマンを超えていく励ましを与えなくてははいけません。だいたいそれが「超人」というニーチェのプランの前身です。

「永遠回帰」というのは、一つのたとえ話です。「世界は

ぐるぐる永遠に回帰しているんだ」と、一人ひとりの人間が達観できると、人間がルサンチマンによって生きるということはむずかしくなるはずだ。このイメージを借りて、ニヒリズムを乗り越えようとする一つの思想的方策です。

ニーチェは、人間が世界を認識する方法を根本的に一から考え始めて、ヨーロッパのニヒリズムを批判しているんです。そのニーチェの認識論の根本には「力」の思想というのがあります。この力の思想というのが、ヨーロッパのいろいろな認識論や構造論を根本的にひっくり返すような仮説だったわけです。

それまで、哲学というのは、人間というのは正しい認識の力をもっていて、その認識の力を正しく使えば世界というものを客観的に正しく認識できるはずだと考えてきた。特に近代では、世界があるがままに正しく認識する方法というものを探究していたわけです。ところがニーチェは、客観存在なんていうものはない。だから客観的な真理などというものもない。価値評価ということが根本にあって、価値評価の上に認識というものが成り立っているだけだ、と言うのです。たとえば、アミーバを考えてください。アミーバは、世界というものを正しくというか、客観的に認識しないですね。アミーバが認識するのは、何かという方向こうから餌が近づいてきたとき「あれは餌だからつかまえてよう」ということと、自分の敵が近づいてきたとき「食

われてしまうから逃げよう」ということです。これが価値評価です。

ニーチェは、人間が行なっているのは、価値評価だけだと主張しました。したがって、認識というものは、必ず、ある価値評価の観点をもっていて、その価値評価の観点が違えば、認識というものは異なってくる、と。

キリスト教や仏教などの世界宗教を例にとりましょう。キリスト教の観点から世界を見ると、神がいて神が全てのを創り出したというかたちで、世界が全部うまく説明できます。仏教という違う観点を立てると、またそこから全部整合的に一貫した説明ができる。価値評価の観点が定まれば、世界の説明というのは、いくらでも整合的な説明の体系ができるのです。ある観点を固定すれば、それに応じて世界はいろんなふうに見えてくる、ということ。ニーチェは「力」の思想という視座でもって、そういうことを見据えていたんです。

2

次にソシュールですが、ソシュールというのは近代言語学の祖と称せられていて、それまでの古い言語学のあり方を一変させてしまった人です。それまでの言語学というのは、文法の整理だとか比較言語学、あるいは歴史言語学を軸にしていたのですが、ソシュールはそのようなことをや

めてしまった。言語が、なぜ一定の規則によって一定の意味を通じさせるのかという問題だけにしぼって、ソシユールは考察した。彼は言語に対して次の三つの角度から分析を行ないました。

一つめの分析は、ことばというのは、シニフィエとシニフィアンという二つの契機のもとまりであるということである。シニフィエというのは言語の記号性です。「ウマ」ということばの「ウマ」という音、あるいは字です。日本語に訳すと言語表現という言い方をしますが、言語の表記のことです。そういう側面と、「ウマ」という音が、パカパカ走る馬を表わす。ウマという表記とパカパカ走る馬という概念が結びついている。一つのことばには、その言語表現という契機とその意味内容の二つがくっついているということです。二つめはラングとパロールという分析軸です。ラングは、国語ともいいますが、言語の規則のことです。どんな国語でもその国語独自の規則をもっていて、その規則に則ってしゃべらないと、その言語は通じない。その規則がラングです。そして実際に人がことばを話すことがパロールです。三つめの分析は、通時態と共時態という軸です。古い時代から新しい時代に向かって言語はどのようなように変わってきたか研究するのが通時態です。共時態というのは、今、この空間でどういう言語規則によってことばが通じているのか、ということの研究する態度のことです。ソ

シユールは、そのように、言語を形式的に分割して、言語によってなぜ意味を通じるのだろうか、ということの研究したんですね。そうして、言語の規則というのはよく考えてみると、まったく根拠がないということが分かってきた。普通、言語には規則があって規則に則らなければ通じないと考えていますが、国語と国語では言語の規則はバラバラである。同じ日本語でも時代によって言語の規則も語彙も変わっている。いったい言語の規則というのは何だろう。ソシユールはそのことを一生懸命追究して、とうとう結論が出ず、言語学研究をやめて沈黙してしまふ。ソシユールにとつて言語というのは、考えれば考えるほどよく分からないものであったわけです。

このソシユールの研究から、明らかになってきたのは、言語というのは、正しい認識や正しいコミュニケーションの道具ではなく、言語そのものが、現実あるいは客観というものをつくりだしているのではないだろうか、ということとです。どういふことかというところ、森や野原や田んぼがありますが、それは、森や野原や田んぼというものともとあって、そこに森とか野原とか田んぼということばを与えているんだって思いこんでしまいがちですね。ところが言語というものをちゃんと分析していくと、実は、人間がことばによって、いろいろな現実を分割して秩序づけているだけではないか、ということが分かる。ソ

シュールの研究によって明らかにされたこの視座が、もう一つの世界観の転換をもたらしたのである。

3

最後に、ヴィトゲンシュタイン。この人は初期の頃には厳密論理主義で、言語と現実とは一致していると考えたんです。いちばん特徴的なのは世界で起こっている事柄は全部ある要素命題に還元できる、と述べたんです。世界の全体というのは、今、起こっていることと、かつて起こったことと、これから起こりうるであろうことの総体である。いろいろな事実は要素命題に分解できる。要素命題に分解できたら、要素命題を全部集めれば世界になる。そういう考え方を『論理哲学論考』という本の中で厳密に展開したんです。ところが、後期になると、その主張を全部捨ててしまう。どうして捨ててしまったかというところ、要素命題ということを考えていったときに、言語においては最小の要素というものが見い出せない、ということに気がついたからなんです。とても分かりやすい例は、虹です。日本では虹は七色ですが、西洋では六色と言われている。また、三色しかないと言う人たちもいるそうです。つまり、虹の色の分け方は文化によって違うんですね。虹のスペクトルは切れ目がないので、いくらでも細かく分けられます。だから虹についての要素命題は三つにも七つにも百にもな

ります。虹を本当に分割できるかというところできない。ヴィトゲンシュタインは、ことが現実を分けるというときに、その要素というものは現実の側にあるとは想定できないということに気がつくのです。そこからが、ヴィトゲンシュタインの面白いところなんです。言語とというのは何であるかと、いろいろ悩んだ挙句「言語というのはゲームではないか」という変な考え方をするんですね。「言語ゲーム」という表現を使います。言語というのはあるルールによって通じていますが、この言語のルールというのは、誰にも明示できない。たとえば、東京弁と大阪弁というように場所が違うと言いまわしが違います。また、五年前と現在では、ことばのルールが違う。最近「食べれない」など「れ」抜きことばがはやっていきます。だめだという人もいますが、みんなが使い出すと、それが新しいルールになります。つまり、言語のルール、言語の規則の根拠というのはどこにもない。誰が決めるわけでもなく、人間がしゃべっているうちにできてくる。いわばはつきり書かれたルールブックのないゲームに似ているというのです。人はいたいルールに応じて、なんとなく習慣的にしゃべっているが、しゃべっているうちにルールは変わっていく。そして、そのルールは明示的に取り出すことができない。これが「言語ゲーム」という視座です。

この考え方が面白いのは、ただ単に「言語ゲーム」とい

う奇抜な用語にとどまりません。ヴァイトゲンシュタインやソシュールには、「そもそも人間は言語によって世界をつくっているのではないか」という問題意識が共通しています。そこから、生活世界、あるいはもっと大きく広げて世界の秩序というのは、言語によってつくり出されたいろいろなルールの体系ではないだろうか。社会全体が、実はこの言語ゲームではないだろうか、という三つ目の世界観の転換が打ち出されてくるわけです。

以上お話しした、ニーチェ、ソシュール、ヴァイトゲンシュタインの視座が、十九世紀までの世界観、つまり世界の内部には、ある客観的な秩序があって、それをどうやってきちんと認識するか、いかにすれば、客観的な世界の秩序、構造が認識できるかを追い求めてきた古典的な世界観を根本からひっくり返してしまつたのです。

世界、あるいは人間社会というのはあるルールによって成り立っているんですね。人間というのは社会のなかで生活するときには、根拠のないルールに則ってゲームをしているわけです。

現代フランスの思想家のフーコーは、「世の中、社会とというのは、真理のゲームである」あるいは「権力というのは、真理のゲームである」という見方をしています。現代社会ではいろんな人間の考えを集めて何が真理かということとをうまくつくり出すのが、権力を創出するための方式で

あると。ある人がルールを決めて、ほかの大勢の人が守る。守ることが正しいと一般に認められると、その社会は権力をもってひとつのシステムを形成するんですね。しかし、それはゲームにすぎないから、そのルールによって社会が存在しなくてはいけないという、絶対的な根拠はどこにもないということです。

いろいろな文化はいろいろな自分たちのルールをもち、自分たちの人間観、世界観を有しているのですが、どれも正しいという根拠はどこにもない。世界の秩序、あるいは客観というものの考え方が成立しないということから、やっとそういう考え方、つまり「文化相対主義」が成立してきたわけです。

人間はある社会に産み落とされて、暗黙のうちに、その社会のルール、その社会の人間観、文化像を教え込まれます。知らないうちに自分の感性を形成していく。ところが、自分のもっている感受性や文化的感覚が絶対であると考えたとたん、違う文化や違う民族を排除したり、差別したり、けんかをしたりするんです。だから、みなさんが文化の問題を考えるときには、自分の感性が一つの世界観しかもっていないかどうか、よく注意する必要があります。自然のままでは、人間は一つの世界観しか保持できないのです。しかし、いろいろな世界に向き合ってみると、違う世界観

がぜんぜん違う形で成立している。少くともその中で二つ目の世界観を知ることが大事なんです。でも、二つ目の世界観では、まだ足りないところがあります。いちばん初めに自分がもっていた世界観にもう一つの世界観がやってくると、今までの間は間違っていて、本当は新しくきた世界観が正しかったんだと思ひ込む可能性があるんですね。人間の世界観や価値観はいろんな形でたくさんあるんだということが、自分の中で腑に落ちたときに、初めて、本当の意味でいろいろな文化および人間のもっている価値観を相対化できる。そして、自分の価値観と他の人間の価値観が対立したときには、どうやって、新しい形で共有できるような合意を取り出していくのか、と考えていかないと、文化の問題はなかなか前へ進まないのです。

現代の文化研究の基礎的視座ともいうべき、「文化相対主義」という発想が、一体どういう世界観の転換を経て成立したのかということをも、もう一度考え直していただければありがたいと思います。

(ただだ せいじ・文芸評論家/明治学院大学)

*一九九二年二月四日の「文化学原論」学外講師による講演の記録(文責=編集部)。

竹田青嗣(ただだ・せいじ)氏のプロフィール

一九四七年、大阪に生まれる。一九七一年、早稲田大学政経学部経済学科卒業。文芸評論家。一九九二年より明治学院大学国際学部教授(「人間論」担当)

主著

- 『在日』という根拠——李恢成・金石範・金鶴泳(国文社)
- 『陽水の快楽——井上陽水論』(河出書房新社、河出文庫)
- 『意味とエロス——欲望論の現象学』(作品社)
- 『世界』の輪郭(国文社)
- 『現代思想の冒険』(毎日新聞社、ちくま学芸文庫)
- 『世界という背理——小林秀雄と吉本隆明』(河出書房新社)
- 『ニーチェ』(FOR BEGINNERS シリーズ、現代書館)
- 『ニューミュージックの美神たち——LOVE SONG に聴く美の夢』(飛鳥新社)
- 『夢の外部』(河出書房新社)
- 『現象学入門』(NHKブックス505、日本放送出版協会)
- 『批評の戦後と現在——竹田青嗣対談集』(平凡社)
- 『自分を知るための哲学入門』(筑摩書房)
- 『自分』を生きるための思想入門(学芸文社)
- 『世紀末のランニングパス 1901-92』(加藤典洋との共著、講談社)
- 『差別ということば』(池田清彦・柴谷篤弘編、明石書店)